受験本番を乗りきる指導

連続する試験の中で、最後までがんばれるよう指導する

高校3年間の学習の成果を発揮する時期が、いよいよやってくる。すべての担任が、1人でも多くの生徒が目標を実現してほしいと願っていることはいうまでもない。それでは冬休み以降、担任としてどのような指導をしたらいいか。また、センター試験の結果を受けて、どんなポイントに気をつけて出願校決定のためのアドバイスをしていけばいいのだろうか。最後まで生徒ががんばれる環境作りのポイントはなにかについて考える。

最終段階の受験指導について、三つの時期に分けて必要なポイントを具体的に考えてみたい。

冬休み～センター試験当日

冬休みはセンター対策が中心

冬休みは、完全にセンター試験対策にシフトする時期といっていい。教材の中心はやはり過去問題集。ほかにこれまでのマーク模試、センター試験直前問題集などの教材がある。生徒の中には焦りから新しい問題集などで難しい問題に手を出そうとする者もいるが、センター試験に出る範囲は教科書を理解していれば十分対応できる部分なので、新しい教材に手を出す必要はない。今までやってきたことを一通りチェックし、定着させるのが一番といえるだろう。

同じところを繰り返すことで、その分野・問題へのアプローチのしかた、知識の使い方、まとめ方、応用のしかたなどをきっちり身につけることができる。同じ問題を解く場合は、以前より5分、10分と早めに解くようにする。時間勝負の本番で、その訓練は役立つ。

この時期は、地歴公民や理科の学習ばかりに没頭し、学習が偏る生徒もいる。しかし、国・数・英は継続した学習が要求される教科であり、多くの大学でセンター試験での配点も高いので、毎日応分の学習時間は確保したい。

本番に向け、センター試験の実際の時間割どおりに、各科目の問題を解いてみるのもいい。本番同様2日かけて、1日目10時から英語、12時50分から地歴というように、ぴったりその時間に合わせて取り組むようにする。

問題を解くときは第1問から順番に解いていくのではなく、時間配分を考えて、答えやすい問題からとりかかる習慣を身につけさせる。順番どおりにやると、途中の問題で思わぬ時間をとられ、あとの問題に行き着かないという危険があるため、まず問題全体を見渡して、解く順番を判断する習慣を身につけさせたい。合わせて、自己採点の練習もさせておくといいだろう。

生活面では、冬休みに入ると、ともするとそれまでの生活リズムが崩れがちになる。夜早く寝て十分に睡眠をとり、朝きちんと起きて昼間に勉強するよう指導する。これは最後の試験が終わるまでいえることだが、本番の試験を意識して、その時間帯に学習サイクルを合わせるようアドバイスしたい。

保護者には子どもに対して普段どおりに接するよう注意を促しておきたい。受験生に対して腫れ物に触るように接する家庭もあるが、かえって生徒の気持ちを萎縮させることもある。また、「○○大以外はだめ」とプレッシャーをかけたり、休憩している子どもに「余裕あるわね」と皮肉をいったりと心ない言葉は慎むようにもお願いしておく。

冬休みが終わると、センター試験まで約1週間しかない。学習法は、冬休みのやり方を続けるのが基本となる。この時期の授業はほとんど演習中心になるが、ただダラダラやるだけでは効果が上がらない。本番を意識させながら、時間を計って時間内で解答させる実践演習のつもりで取り組ませたい。

本番2、3日前には、それまでのノート、暗記カードなどを使って総点検しておくといいだろう。気分的にもこれだけやったという安心感が持てる。

3学期は授業が休みになり家で学習する生徒が出てくるが、学校でやれば気分転換にもなるし、その場ですぐ教師に質問できる利点もある。精神的に追い込まれているような生徒には、できるだけ学校に出てくるよう指導する。

センター試験は5教科受験を

いよいよセンター試験当日。生徒はセンター試験対策で科目別の目標点を設定していたはずだ。しかし、試験中に目標点をあまり意識すると、かえって失敗する危険がある。例えば、英語に140点の目標を持っていた生徒が、予想で110点程度しかとれなかったとする。実は、その年の英語は難しくて、全体の平均点が90点しかなかったとしたら、この生徒は本当は善戦していることになる。難しい問題は他人もできていないことが少なくないのに、本人は目標点よりかなり低いと考えるため、第1日目から焦ってしまう。「英語の失敗をほかの科目で取り返さないと……」と自分にプレッシャーをかけてしまい、かえってあとの科目に集中できなくなる。

本番が始まったら目標点を意識せず、受験する科目に全力を尽くすことが大切。失敗したと思ってもクヨクヨせず、気持ちを切り換えて次の科目に臨むよう事前に指導する。当然、第1日目の夜に自己採点することは避けなければならない。

当日は、空き時間を作らず理科①と理科②の両方を受けたり、2日目最後の公民に挑戦するよう指導しておきたい。公民は受験勉強をしていなくても普段の授業をきちんと受けていれば、比較的点がとれることがある科目である。大学によってはセンター試験で課す教科が前期日程は4教科、後期日程は5教科というようなところもあり、4教科の勉強しかしていなくても、空き時間を使って公民や理科を受けておけば5教科受験になる。後期日程試験への可能性を広げるためにも、5教科を受けるように指導したい。

後期日程試験までのスケジュール

12月下旬	2学期終業式　冬休み
1月初旬	3学期始業式
1月16、17日	センター試験
1月18日	自己採点
1月21、22日	全国データでの説明会
1月23～25日	最終面談による出願校決定
2月3日	国公立大の出願締め切り
2月上旬～中旬	私立大入試ピーク
2月上旬～3月下旬	私立大合格発表
2月25日～	国公立大前期日程試験開始
3月8日～	公立大中期日程試験開始
3月12日～	国公立大後期日程試験開始

センター試験当日までの指導のポイント

- 冬休み以降、過去問題集を中心にセンター試験対策にシフトするよう指導する。同じ教材で繰り返し勉強し、基本的には新しい教材に手を広げない
- 地歴・公民や理科に学習が偏る生徒もいるが、国・数・英も継続的にバランスよく学習させる
- 本番の練習として、センター試験の時間割どおりに、2日かけて演習問題を解いてみる。問題は第1問から順番に解くのではなく、比較的答えやすい問題から解く習慣をつける
- 冬休みからは特に生活リズムに気をつけ、夜は早く寝て、試験時間に合わせて朝、昼に勉強するよう指導する
- 保護者には、受験生として気を遣うあまり、家で特別扱いすることのないようお願いしておく。また、子どもにプレッシャーを与えるような心ない言葉は慎むようにしてもらう
- センター試験当日は、目標点をあまり意識せず、科目ごとに気持ちを切り換えて全力で取り組ませる
- センター試験では空き時間を作らず、できるだけたくさんの科目を受験するように指導する。結果によっては受験校選択の幅が広がることもある

センター試験後

いち早く気持ちを切り換えさせる

センター試験の翌日、つまり月曜日はまず、自己採点から始める。自己採点はミスに注意し、誤差を最小限にとどめるように注意を促す。

自己採点のあとに判定のために提出する志望校は、2学期後半に決めていた第1併願パターン、第2併願パターンどおりの大学名を書くように強くいっておきたい。センター試験の結果を自己判定して結果がよかったからと、難関大ばかり並べて書いてみる生徒、またその逆の生徒も少なくない。しかし、それではその後の指導の指針が出てこないし、それまでの進路指導の流れから外れた受験校決定になってしまう。生徒が書いた大学名を担任がチェックする時間的余裕はないので、事前にその点を生徒にきちんと伝えておく必要がある。

センター試験での合格可能性判定が送られてくるまでの間、生徒の中には入試が終わったような気分になってしまったり、不安から勉強が手につかなくなったりする者も出てくる。担任はいち早く生徒の気持ちを切り換えるよう指導したい。

センター試験が終わると、生徒の間に「今年の試験は難しかった」とか、「平均点が上がりそうだ」といったいろいろな情報が流れてくる。しかし、あくまで推測であり、集計結果が出るまではっきりしたことはわからないし、実際は推測と異なっていたということも少なくない。そうした情報に惑わされないよう伝え、個別試験に向けて生徒が早めにスタートを切ることができる雰囲気を作っていく。

学習面では、個別試験対策はやはり過去問題集が中心になる。出願予定校の入試問題を少なくとも過去5年間分は解いて、完璧に理解させるようにする。さらにさかのぼれるなら、10年間分の入試問題に目を通せば、その大学の出題傾向はよりはっきりしてくるはずだ。

いずれにせよ、センター試験が終わってから個別試験まではある程度まとまった日数があり、対策を立ててそれをこなす時間はある。決して焦ったり慌てたりしないように生徒にはいっておきたい。

また、センター試験が終わると登校する機会も少なくなってしまうので、生活のリズムを崩しやすい。夜型の学習をしている生徒には昼型へ戻すようアドバイスしておく。

迷っている生徒を重点的に面談

センター試験の結果を基にした志望校の合格可能性判定が返ってきたら、受験校決定のための最終面談となる。とはいっても、担任もこの時期は非常に忙しく、生徒全員に十分な時間を振り分ける余裕は見つけにくいのが現状だ。面談スケジュールを決める方法の一つとして、黒板に面談日を時間ごとに区切っておき、センター試験のデータ集計結果が出た直後から、各生徒に面談希望時間帯をそこに書き込ませていくやり方がある。そうすれば都合のいい生徒から面談でき、大切な時間を有効に使える。

面談は、センター試験の出来がよく、判定結果もいい生徒の場合はさして問題はない。それでも、担任が「よし、その大学でいけ！」と励ますのと、なにもいわないのとでは、生徒の意気込みに差が出る。短い時間でもいいから面談をしてやりたい。また、心配症の生徒には、合格者、不合格者の偏差値の度数分布表を見せて、合格が可能な範囲内にいることを確認させて安心させたり、反対に浮かれがちの生徒には、「A判定でも落ちることがあるんだから、気を抜かないように」と注意を促すなど、生徒の性格に合わせた個別対応をとることが望ましい。

問題は、志望校を変えるべきかどうか、限られた時間の中で決断を迫られている生徒の場合だ。迷いに迷って出願の締め切りが迫ってもまだ迷っているケースもある。決断して進めないため個別試験対策に取り組むきっかけを失い、にっちもさっちもいかなくなっていることもある。

志望校を変えるかどうか、その見極めは担任にとっても難しいケースが多々ある。C判定が出ていても、個別試験の力との関係で困難が予想される場合もあれば、逆にD判定でも個別試験の力があるので、可能性がある場合も出てくる。過去の模試結果を見て、さらに教科担当の意見などを聞き、今年の志願者の動向や昨年度の合否状況などを見て、総合的に判断していく必要がある。進路担当の教師に問い合わせて、出題傾向などの入試情報を得る方法もあるだろう。いずれにせよ、生徒本人が納得して、前向きにがんばれる環境を作ってやりたい。

説得力のある資料で面談

生徒は、面談の場で担任が提示する資料が説得力のあるものなら、担任のアドバイスを受け入れる姿勢を見せる。度数分布表などを使って、C判定やD判定はこの辺、自分はそれよりもっと下という事実を表や数字として見せられれば、生徒も本心から納得して結論を出す。模試の段階までは、第1志望校をあきらめさせないことが指導の原則だったが、センター試験はその結果が持ち点になるので、教師もある程度現実的判断に基づいて指導せざるをえない。

重要なのは、新たな別の受験校を生徒に提示するときには、生徒の目の前で、客観的データを提示しながら、生徒自身に最終的な判断をさせるというスタンスであろう。

担任団で検討会を開く

志望校に合格できるかどうか微妙、もしくは難しい生徒の場合、面談の場で担任の側から最終的な出願校決定のための判断材料をある程度提供してやる必要がある。具体的には第1併願パターンでいけるかどうか、第2併願パターンならどうかの判断材料、さらに必要なら新たな別の受験校の提示である。新たな受験校は、全国データを基に過去の模試結果、度数分布表などを使って探していく。

面談の前に担任団が集まって個々の生徒について検討会を開く方法もある。担任1人だと判断が難しいケースでも、複数の教師の目を通すことで、より適切な判断を下せることがある。例えば、担任が文系教科を教えている場合、理系の生徒については判断が難しいことがある。こんなときに担任団がそろっていると、数学や理科の教師から「この生徒は、個別試験で通用する力を持っているからいけるのでは」などと、普段の授業の中で感じた手ごたえから助言がもらえるだろう。また、担任が気がつかない、その生徒にふさわしい受験校を、ほかの教師から提示されることもある。

生徒との面談のときにも、「○○先生がこういうふうにいっていたよ」「△△先生がこういうアドバイスをしてくれたんだ」「もう少し話を聞きたければ、××先生のところに行ってごらん」と、複数の目ならではの話をすることもできる。

ただし、検討会を開くには音頭をとる教師がいて、その教師なりほかの教師なりが各生徒の資料をあらかじめ作っておく必要がある。それでなくても忙しい時期なので簡単なことではないが、なんとか時間を作って実施したいものである。

二者択一まで提示あとは生徒の決断

実際の面談の場で、第1併願パターンでいくか断念するか、断念する場合は第2併願パターンでいくか、あるいは新たな別の大学にするか、その場で決めるようにといっても、生徒はなかなか決断できるものではない。第1併願パターン、第2併願パターンとも難しい生徒の場合、合格可能性の高い新たな大学を提示されると気持ちは動くが、今までの志望を覆すわけだから、慎重にならざるをえない。遠距離の大学を提示されたような場合はなおさらである。

教師としては二者択一ぐらいのところまで持っていったうえで、「決断はきみに任せる。家に帰ってご家族とよく話し合ってごらん」と、生徒に考える時間を与えるようにしたい。たとえその場でいずれかを決めても、家庭で経済的問題などが持ち上がることもあるので、最終的には家族を交えて結論を出すことになる。

志望校の変更を勧める場合、生徒を不安な気持ちにさせないように言葉遣いに気を配る必要があるだろう。「きみの力では△△大の方がいい」というようなストレートないい方をすると、「あれ？　自分が考えていたところはだめなんですか」という反応が返ってきてしまう。自分としては自信を持っていたところを、先生はだめだと思っているのか、と生徒はいきなり不安になるだろう。

志望校を変えた方がいいという教師の判断を、生徒の不安を打ち消しつつ、しかも、最終的には生徒自身が納得し

て、前向きに新たな大学に取り組めるように伝えることはなかなか難しい。「これは一つの意見として聞いてくれ。○○大もいいかもしれないが、△△大もきみのやりたいことをかなえてくれる大学だと思う。もちろん、最終的にはきみが決断すべきことだが」といった表現を使うなどの配慮が求められる。

生徒が私立大への進学も考えている場合なら、私立大受験についてはその生徒の力より上位の大学も志望させるというやり方もある。「私立大はここぐらい挑戦してもいいんじゃないかな。じゃあ、国立大はここにしよう」と、国立大については難易度を下げた新たな志望校を提示して、教師の本音をそっと差し出すようにする。

いずれにせよ、もともと志望校のボーダーラインと差があって、センター試験で得点を稼ぐつもりがうまくいかなかったケース、個別試験の力がなくて挽回（ばん）が望めないケース、センター試験の配点比率が高いのに失敗したケースなどは、現役合格にこだわるのなら、教師の判断を生徒に理解してもらうことが大切である。

私立大については、経済的、日程的に無理がない限り、意欲的に挑戦させた方がいいだろう。国公立大受験は「AかBか」の判断だが、私立大は「AもBも」が可能だからである。

私立大入試でつい見落としがちなのが、ここ数年急速に増加しているセンター試験利用私立大だ。アラカルト型入試も多いため、5教科の総合得点は少なくても、3教科や2教科だと有利になる場合もある。大学の教育・研究内容や条件などが十分に納得できれば、そういった機会を利用させるのもいいだろう。ただし、受験科目が少ないと、その科目を得意とする生徒が大勢集まり、高レベルで高倍率の入試になることが多いということは生徒にも理解させておきたい。

判断材料を生徒に与える

生徒によっては浪人するという選択肢もある。明らかに受験勉強のスタートが遅れて、ひたむきに努力したが時間が足りないために全分野までカバーできなかったという生徒は、あと1年がんばれば伸びる可能性がある。逆に、浪人してもあまり力の伸びは期待できない生徒もいるだろう。

浪人して伸びそうな生徒には、面談の場で現役で合格する可能性のある大学を資料として提示したうえで、「どうしたい？」と本人の意向を確かめる。「その大学に行く」といえば、現役合格をめざさせ、「浪人して第1志望校をめざしたい」というなら、その方向に向かわせる。

2段階選抜実施を予告する大学について、そのボーダーラインから出願の可否を教師が判断するのは難しい。進研のデータネットなどの予想ラインを利用して、最終的には生徒がどう判断するかに任せるしかない。特に、生徒の点数が門前払いぎりぎりと予想されるときは、本人が決断を下すしかない。生徒がその大学にどうしても行きたいというなら、「門前払い覚悟で出願してみてもいいのでは……」というアドバイスにならざるをえない。いずれにせよ、担任から与えられる判断材料はできるだけ生徒に与えるようにする。

センター試験後の指導のポイント

- センター試験の自己採点ではミスをなくし、誤差を最小限にとどめる
- 合格可能性判定のための志望校提出は、原則として前もって決めておいた第1併願パターン、第2併願パターンどおりの大学名を書かせる
- センター試験が終わったら気持ちを切り換えさせて、1日も早く個別試験の勉強に向かうよう指導する
- 個別試験対策は過去問題集を中心に行う。過去5年間分の出題内容は完璧に理解させておく
- 最終面談では、センター試験がうまくいかなかった生徒に対して、担任の側から新たな別の受験校を提示する必要もあるので準備をしておく
- 面談の前に担任団で個々の生徒についての検討会を開くと、対策面でいいアイディアが出ることが多い
- 面談の場では出願校をどこにするか、二者択一ぐらいのところまで担任が提示し、あとは生徒に時間を与えて考えさせる
- 志望校の変更を勧める場合、生徒を不安な気持ちにさせないよう、言葉遣いに注意する
- 私立大については、可能性のある大学はできるだけ出願させた方がよい。センター試験利用私立大の活用も考えたい
- あと1年勉強すれば実力の伸びが期待できる生徒には、浪人の選択肢もありうる
- 2段階選抜実施の有無についての予想は難しい。判断材料を生徒に与え、最終的には生徒に判断させる

私立大受験時期から最後まで

最後まで望みを捨てさせない

2月上旬から私立大の合格発表が始まる。発表があっても、その結果を担任に報告してこない生徒は案外多い。学校にも来ないため、その大学に合格したのかどうかさえわからない。不合格で落ち込んでしまい、連絡してこないことも考えられる。2期試験など、まだ間に合う大学が見つかることがあるにもかかわらず、連絡しないばかりにその時期を逸してしまうこともある。当たり前のことだが、入試の結果については担任に報告するよう事前に注意しておく。

合否も含めた生徒の状態については、登校日のときにチェックをする。不合格だった生徒には、精神的ケアとその後の対策を講じる必要がある。特に、合格間違いなしと思っていた大学に失敗すると、精神的にかなり落ち込んでいることもある。「もともと力があるんだから、焦らなくてもだいじょうぶだよ」と落ち込みから立ち直らせ、もう一度次の受験に奮い立たせるケアをしたい。

複数の私立大に続けて落ちた生徒の場合は、担任としては2期試験も腹づもりとして考えなくてはならない。ただし、受験が残っている段階では、生徒にはそのことはまだいわない方がいいだろう。

また、国公立大を第1志望にしている生徒でも、私立大に合格すると気が抜けて、緊張感が切れてしまうことがある。後期日程試験までがんばる気持ちを持ち続けるためには、第1志望校へのあこがれをかき立て、やる気を高めてやることが大切だ。保護者が、一生懸命に受験勉強を続ける我が子をふびんに思い、「合格した私立大でもいい」というようなことをいうと、生徒の意欲はいっぺんにしぼんでしまいかねない。最後の受験まで意欲を保たせるように、あらかじめ保護者にお願いしておきたい。

後期日程試験は、学部・学科によって募集人員が極端に少なかったり、試験科目に小論文や英語のテーマ作文といった生徒にとって比較的なじみの薄いものが課せられたりするため、かえって前期日程試験よりも難しいのではと敬遠する者も少なくない。しかし、そのような生徒に対しては、少々乱暴ないい方だが「後期日程試験は前期日程試験をクリアできなかった受験生が集まってくる試験であり、極端に高いレベルの争いになるとは考えにくい。合格の可能性はきっとある」と伝え、最後のこのチャンスまで全力を傾けるよう指導したい。

試験終了後、外出して長期間家を離れてしまう生徒もいる。しかし、この時期は補欠合格についての問い合わせが、大学から生徒の自宅に突然あったりする。例えば朝、「補欠合格となったが、入学の意思があるか、午前中に返事をするように」と電話がかかってくることがある。ところが、本人は外出していて連絡がつかず、返事ができない。その結果、入学の意思がないと見なされて、せっかくの合格のチャンスを失ってしまう。こういったことが国公立大では後期日程試験のあとで起こりうる。したがって、生徒はこの時期は家を離れないことが原則である。やむなく出かけるときは、必ず家の人に連絡先を伝えておくことが大切だということを生徒に理解させる。

私立大受験時期からの指導のポイント

- 合否結果を必ず報告するよう指導しておく
- 登校日に生徒の状態をチェックする。私立大入試に失敗して落ち込んでいる生徒には精神的ケアとその後の対策を講じる
- 国公立大が第1志望でも、併願した私立大の合格で、意欲と緊張が薄れてしまう生徒も。生徒、保護者ともに第1志望校合格の意欲を最後まで持ち続けるよう指導する
- 後期日程試験にも合格のチャンスは十分にあることを生徒に伝える
- 大学側から補欠合格の問い合わせが生徒に入ることもある。長期間自宅を離れないよう指導する